

# わたしの聖戦

女性が働くこと

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

連載  
213

## 人類と病

相変わらず、日本の死因第一位は「がん」。死亡全体の28%を占めている。

早期発見の手段や治療の効果が功をなして、がんが死に直結する病気ではないことはすでに周知の事実である。一方で、がんは細胞の老化といいつつ、近年ではAYA世代（アヤセ代）といつて、若い人がんも注目を集めている。

Adolescent and

Young

の頭文字を取つたもので、思春期及び若年成人と訳される。年齢でいえば15～39歳あたりだろうか。その世代の多くが病気とは無関係に過ごしている一方で、が

るけれど、まさかそんな早くに自分の身に起ることは考えていなかつただろう病気にはかかるとは、それこそ本人でないとわからない苦悩や驚きがあることは容易に察することができる。

ちなみに、多いのは白血病などの血液のがん、乳がんや子宮頸がんなど若い女性に多いといわれているものが目立つが、そのほかに、胚細胞腫瘍（はいさいぼうしゅよう）という耳慣れないがんがある。漢字そのものが難しいのだが、あえて説明すると、生殖器（精巣・卵巣）と体の中心線に沿った部分、胸の中やお腹の中、脳の一部などに発生しやすい悪性腫瘍のひとつ

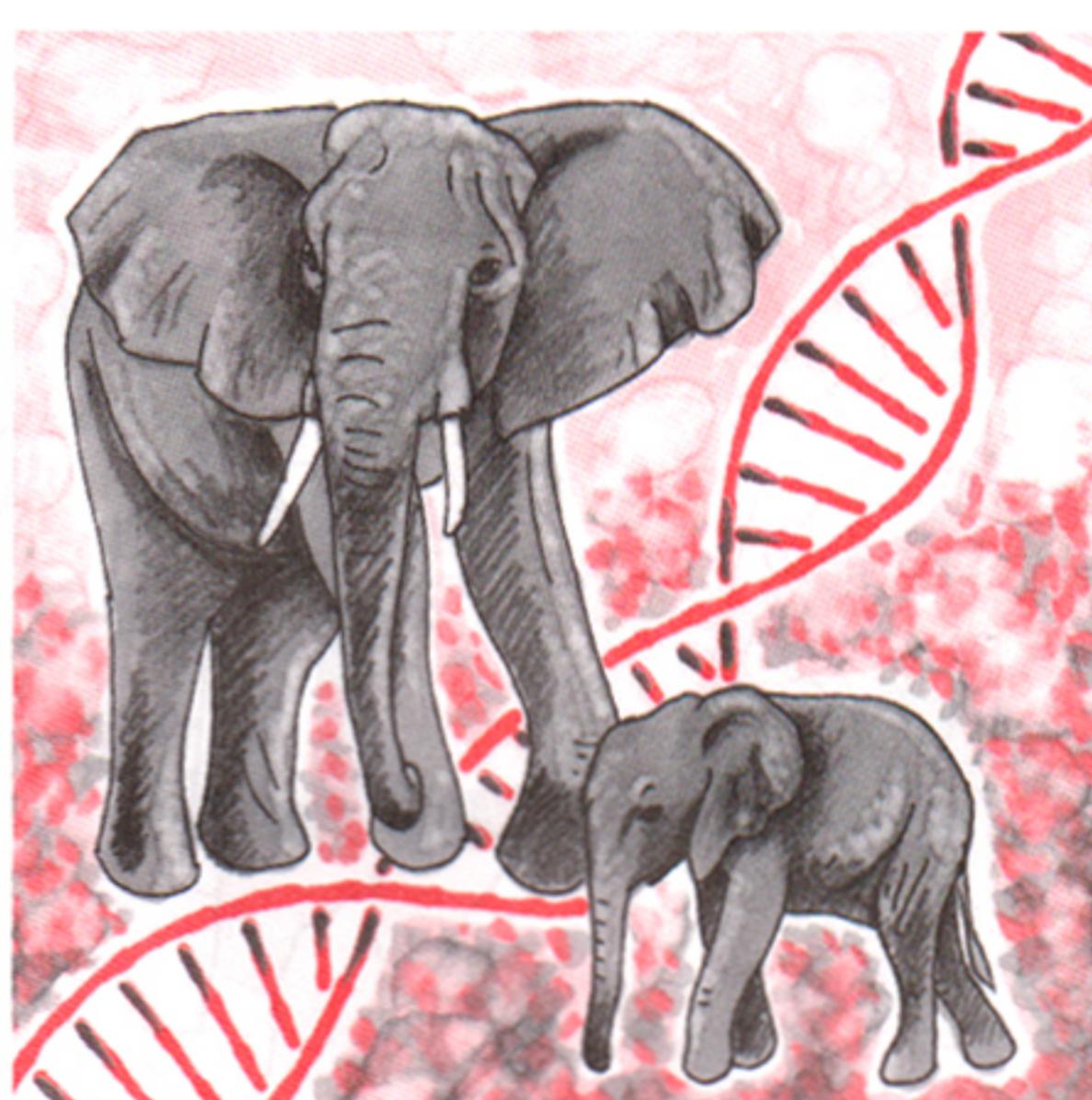
とされる。母親のおなかの中にいる、まだ胎児のとき能力を持つ原始胚細胞とう細胞が悪性腫瘍になつたものだという。

ヒトは、ある時期になると母親の子宮から産道を通つてこの世に姿を現すが、

ところで、がんは恐竜も苦しんだといわれるほど昔からある病気だが、がんになりにくく動物も存在する。最も身近なところでは、アフリカゾウがそれだ。

高齢化社会にがんが多いことを考えても、細胞数が多く長生きするほどがんの確率は高くなるはずなのに、なぜアフリカゾウはがんにかかりにくいのか？

その答えは2015年に判明している。簡単にいえば、アフリカゾウはがんを抑える遺伝子をたくさん持つているからだ。正常細胞が変異を起こしてがん化するのを抑えてくれるこの遺伝子は、もちろん人間にも



あるが、アフリカゾウには遠く及ばない。両生類のイモリもがんになつた形跡がない。イモリは四肢が切断されてもその後生えてくる。これは人間にはない相当高い再生能力であり、イモリにがんがないのもその点と関連があるらしい。何ともうらやましい話である。

昭和のはじめ、抗菌薬が発明されたとき、これで感染症は克服できると考えた。また、遺伝情報の解析に成功した際には、世界中の人々ががんや生活習慣病の解明や治療は格段に進むと信じられた。しかし、そうではなくたことにすでに皆気づいている。

ひとつのがんが解明されたら、さらに分からぬ難問が控えている、といわれる。

人間が謙虚であり続けることは何と難しいことだろうかと思う。

イラスト・伊藤香澄